
けんぷファー!?

紅神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けんぷファー！？

【Nコード】

N0018J

【作者名】

紅神

【あらすじ】

俺、刃柳刹那はある日送られてきた臓物アニマルのトウシシロクマにより女にされ、ケンプファーになってしまった。

これは、恋愛事以外は完璧超人の刃柳刹那を取り巻く愛と戦いの物語である。

前書き

「あゝあゝテストス……」

「何してるんだ」

俺、刃柳刹那（以降 刹）の目の前で、頭に氷の結晶をつけて内臓が飛び出しているぬいぐるみ、トウシシロクマ（以降 シロ）がマイクを持って何かをしていた。

シロ「見てわからないか？マイクのテストだ」

刹「いや、何でマイクのテストをしている」

シロ「ん？読者たちに説明をするからに決まっているだろう？」

何を言ってるんだ的な目で俺を見ってくるトウシシロクマ。

普通はわかりませんよ？まあ、頭の回りが早い俺だから何通りかの可能性を導き出してみたりしましたが。てか、読者ってなんだよ…？

シロ「何をボケっとしている。そろそろ始めるぞ」

刹「あ、ああ……」

シロ「その前に…（ニヤリ）」

トウシシロクマがニヤリと某新世界の神みたいな笑みを浮かべているように俺には見えた。

いやな予感しかない……

そう思った次の瞬間、トウシシロクマの目が光り、それに呼応するかのように俺の右手首についている黄金色の腕輪が光り、俺を包み込んだ。

光が止み俺がいた場所にいるのはとてもスタイルのいい女性。女になった俺、刃柳セツナ（以降 セツ）がいた。

セツ「シロクマ、何のつもりだ」

シロ「読者サービスだ。脱げ」

セツ「なんで!!」

シロ「サービス心のないやつだ」

サービス心も何もないだろう。ていうか、読者ってなんだよ？

シロ「まあいい、これを読め」

セツ「ん？」

トウシシロクマが、台本みたいなものを渡してきた。

その台本の中身に目を通してみた。

セツ「……これを読めばいいのか？」

シロ「ああ、そうだ」

納得のいかないところがあるが世界の修正力のためか、読まざるおえないようだ。

セツ「この小説は、けんぷファーを原作とした作品です。

一部原作キャラ…瀬能ナツルが初めから女であったり、刃柳刹那がチートキャラだったりします。

以上のことを踏まえた上で読みください……何だこれ」

シロ「読者のための注意書きだ」

セツ「さいですか……」

シロ「というわけで、この作品は作者の妄想などが満載の作品だ。基本主人公である刹那にフラグが建つ。もちろん、ナツルも刹那にゾッコンだ。決してBLではないぞ」

トウシシロクマが補足のよう説明をした。

BLってなんだよ。ナツルは女だぞ。

シロ「そういうわけで、楽しんで読んでくれ」

セツ「楽しんで読んでください！

.....「ねでいいの？」

登場人物紹介

名前 刃柳 はやなぎ 刹那 せつな

性別 ♂

容姿 中性的な美形で銀髪の肩にかかるくらいの髪を一纏めに縛っている。

よく女に間違われることがあり、そのたびにキレる。

性格 温和で社交的な性格ではあるが、所々でSなところを見せたりしている。

その他 星鐵学院の2年4組に在籍をしている。

瀬能ナツル、近堂水琴とは幼馴染で一緒にいることが多い。

基本、いい人なので、誰からも好意を受けている。

その容姿と性格からか、男子女子共に人気が高い。

ある日送られてきたトウシシロクマが切っ掛けとなりケンプファーとなる。

腕輪の色は黄金色と、ほかのケンプファーとは違う。

これは、モデレーターに選ばれた訳ではなく監視者オラザーパーに選ばれたからである。

ツァウバー ケヴェアシェヴェアト
魔法・銃・剣のすべて使える。

CV 白石 涼子

名前 刃柳 セツナ

性別 ♀

容姿 腰の位まで髪が長くなりそれをパニーテールにまとめている。
銀髪のが青みがかったている。長身でスタイルがとってもいい。

基本的な性格は変わらないが、若干クールになる。

トウシシロクマ

凍死したよう形をした白クマの頭に氷の結晶が付いている、刹那のアドバイザー。

臓物アニマルシリーズの期間限定物であり世の中に出回っていない。

メッセンジャーの中で唯一、沙倉楓からもらったものではない臓物アニマル。

声は態度がでかいゆかな。

性別 ♀

CV ゆかな

プロローグ（前書き）

この小説は、作者の妄想によって構成されております。

原作主人公である瀬能ナツルが最初から女であつたりします。

上記のことに不快に感じる方は戻ることをお勧めいたします。

ブローグ

その日は、いつもの通りにセットしていた目覚まし時計を止めて起きた。

俺、刃柳刹那は女になっていた。

起きた時、胸に違和感を感じ下を見下ろすと、大きなお山がふたつ存在していて、その先が見えなかった。

「なんでだよ」

ありえない、それが俺の最初に思ったことだった。

昨日はいつものように幼馴染の瀬能ナツルと一緒に二人で作ったご飯を食べ、他愛もない話をして家に帰って来ただけだったはずだ。変な薬を飲んだ覚えもないし、謎の組織の改造手術を受けた覚えもない。

それよりも、この状況だ。パジャマはいつも着ている物だが、ズボンを穿いていなく、下着は女物だった。柄は、ピンクの縞々しましまだ。縞々しましまってなんだよ。縞々しましまって……

この状況で結構冷静でいられる自分をほめてやりたい。

「ん？なんだこれは？」

よく見てみると、腕に見たこともない腕輪がはめられていた。

「それは証だ」

「は？」

俺は、いきなり聞こえてきた声に驚きあたりを見回した。

「こっちだ、こっち…」

その声の方を見ると、そこには何日か前に送られてきた臓物シリーズの中でも期間限定物で、死んだような眼に顔には雪の結晶が付いており、なぜか腹からは内臓が飛び出ている

“トウシシロクマ”が棚の上にあった。

「ようやく気付いたな…」

トウシシロクマは、口をパカパカさせながらしゃべっていた。しかも、ゆかなっぽい声だし。ゆかなって誰だ？

「って、ぬいぐるみが喋ってる！！」

「今さらだな…」

今更って、喋ったばかりだろおい。

「何なんだ、お前…」

「私はメッセンジャー。お前はケンプファーになった。その腕輪は誓約の腕輪……」

「誓約？」

「そうだ。腕につけることによって、お前の力は保障される。感謝するんだな」

なんとも偉そうなぬいぐるみである。それに、さっきから何を言っているんだ。今までの話の中のどこに感謝しなければならないところがあったのかがわからないぞ。

「待て、意味がわからない」

「これだから童貞坊やは困る。いや、今は処女ちゃんか」

「ぶっ！」

こいつは何を言っているのだ。放送コードギリギリじゃないのか？いや、深夜ならなんとかなるか。

「それで、何が聞きたい？お姉さんが手取り足取り教えるぞ」

俺が戸惑っているのをお構いなしに話を進めるトウシシロクマ

それに誰がお姉さんだ。ただのぬいぐるみだろうが…

「……何なんだ。この姿は」

そう、一番の疑問だ。ぬいぐるみが喋っているのもあり得ないことだが、俺の身体の変化の方があるえ
ない。

「さっき言っただろ。お前はケンプファーになったのだ。ケンプファーは女しかねないのぞな」

「ケンプファーって何なんなんだ？」

「……面倒だな。おい、私をお前の額にくつつける」

「はあ、何で……」

「いいから早くしろ」

「…わかつたよ」

説明してくれるんじゃないのかよ。と、思いながらも俺は言われた通りにトウシシロクマを自分の額にくつつけた。

「！？」

次の瞬間、俺の脳裏にありえないくらい情報が流れてきた。最初に見えたのは地球。そして、剣、銃、魔法を駆使して戦う少女たち。腕に光っているのは俺の腕輪と同じ形をした赤と青の腕輪だった。

なんだこのビジョンは……

『それが、ケンプファーだ』

頭の中に声が響いた。トウシシロクマの声だ。

『ケンプファーとは戦うためのエリート。誓約の腕輪により力は保障され敵を打ち倒す』

「敵ってなんだ」

『さっき見ただろう。赤と青のケンプファーは敵同士。戦い合う運命だ』

「でも、俺のは……」

そう、俺の腕にある腕輪は黄金色。赤でも青でもない。

『お前は特別だ』

「特別？」

『お前は、この戦いの中で唯一どちらにも属さないケンプファー』

意味がわからなかった。こいつの説明だと赤と青で戦うということのはずだ。そのはずなのになぜおれは違うというのだ。頭をフル回転させて何通りもの可能性を導き出した。

『お前は、オブザーバー監視者が選んだ唯一のケンプファー。黄金のケンプファー』

「おつ…こん…の？」

『そうだ。ついでに言うと、お前が黄金のケンプファーであることがバテてはいけなからな』

「はあ！」

なに重要なことをサラッと云っちゃってるの!？

「バ、バレたらどうなるんだ？」

『さあな、何か不幸なことが起きるんじゃないか？』

トウシシロクマは他人事のように言ってきた。いや、他人事ですけど……

てか、不幸なことってアバウト過ぎないか？

『大体のことは先ほどの情報で頭には入っているだろう？』

「あ、ああ……」

そうだ、さつき送られてきた情報により、戦い方、力の使い方、変身の仕方などといったものをすべて把握はした。

『ならもういいな。ああ、お前の腕輪の色は変えられるからな。適当に変えてバレないようにすれ』

「先に言え！」

俺がそう叫んだ瞬間、目の前が暗くなり俺の意識は深い闇へと落ちた。

こうして、俺の奇想天外で忘れることのできない愛と戦いの物語が始まった。

って、愛ってなんだよ！！

プロローグ（後書き）

はじめましての人ははじめまして紅神です。

けんぷファーの面白さにやられて書いてしまいました。

もう一つの連載と一緒に頑張って更新していきます。

楽しんでもらえると幸いです。

第1話（前書き）

これまでのけんぷファー！？は

「って、ぬいぐるみが喋ってる！！」

『さっき見ただろう。赤と青のケンプファーは敵同士。戦い合う運命だ』

『お前は特別だ』

「特別？」

『お前は、この戦いの中で唯一どちらにも属さないケンプファー』

『お前は、オブザーバー監視者が選んだ唯一のケンプファー。黄金のケンプファ

ー』

「おつ…くん…の？」

刹「なあ、このあらすじのやり方ってどこかで見たことが……」

シロ「気にするな。パクリ……オマージュだ」

刹「今、パクリって言ったよな」

シロ「……それでは、始まるぞ」

刹「無視するな!!」

第1話

あれから2週間、俺は変わらない（身体的にはいろいろと変わったけど……）日々を過ごしていた。

最初の2 3日は変身が不安定で学校を休んでいた。

その間、ナツルが押し掛け女房の如く押し掛けてきたが……まあ、なんとかやり過ごしたけど。

4日目頃から安定し始めた。トウシシロクマが言うには、普通はもっと掛かるというのだが……

それはさて置き、俺の腕輪の色は青である。

何で青にしたかというと、何日か前に見かけたうちの学校の子が青のケンプファーだったからだ。

ああ……なんて、適当さ……

「おい、学校に行かなくていいのか？」

「うるさい」

現実逃避をしていると、いつものように偉そうな口調で話しかけてくるトウシシロクマ。

それを、いつものようにうるさいと言って俺は聞き流そうとした。

「いいのか？すでに、登校時間を過ぎているぞ？」

「なっ！？」

トウシシロクマの言葉を聞き、時計を見ると、すでに登校時間ギリだった。

「どうして教えてくれなかった！！」

「何度も言ったぞ。お前が人の話を無視するのが悪い」

それはそうだが……こいつに言われるとムカつくぞ……

「ああもう！いつてくる！！」

そう行つて俺は家を出た。

逃げたわけじゃないぞ！あいつに口で勝てないからって逃げたわけじゃないからな！

今日は珍しくナツルが迎えに来なく、俺は一人で走って学校に向かっていた。

その時、一発の銃声が聞こえた。

おいおい、この日本で銃声ってなんだよ……

しかも、腕輪が反応してるってことは、ケンプファーだよな……

「はあ、今日は遅刻かな……」

そんなことを呟きながら、意識を集中させて女の姿になった。

まあ、変身シーンはそれぞれの想像に任せる。

「行くか」

そして、私は地面を蹴り跳躍して反応がある方へと向かった。

わたしこと瀬能ナツルは今、命の危機に反している。

今日は、いつものように朝起きたら、なんだか知らないけど姿が変わっていて、困惑していると、沙倉さんにもらったハラキリトラがしゃべり始めてさらに困惑した。

それで、ハラキリトラにいろいろと説明を受けたのだけれど……

元の姿に戻れないとハラキリトラに思いつきりヘッドバットをかまされて気絶してしまった。

しばらくして意識を取り戻すと、元の姿に戻っていたので夢なのかと思って安心して腕を見ると青く光る腕輪がちゃんとあった……

「夢じゃないんですねえ」

机の上のハラキリトラがため息交じりに話しかけてきた。

この世の不条理に絶望した。

時間が遅刻寸前だったため、私は走って学校に向かっている。

いつもだったら、刹那の家に行ってから一緒に登校するんだけど……

ううゝ、刹那あゝゝ

「うわあ！」

「きゃっ！」

なんてことを考えながら走っていると、いくつかの曲がり角を曲がった時、誰かとぶつかりそうになった。

「う」……「ごめんなさい、あれ」

謝りながら相手の顔を見ると、よく知っている顔だった。

「わたしこそごめんなさい。よそ見してて……やだ、ナツルさん」

そう言って謝ってきた女の子は、沙倉楓だった。

「よかった……なんて言っちゃいけませんよね。でも、知ってる人で安心しちゃいました」

沙倉さんは、照れ笑いをしながらそう言ってきた。

沙倉楓。我が、星鐵学院を代表する美少女だ。

さわやかな笑顔に艶やかな髪。

若干低めの身長と優美なボディーライン。

全男子生徒のあこがれのもらしい。

わたしは、そんな彼女とは、比較的仲の良い学友ポジションの位置にいる。（ナツルの知らないことではあるが、彼女もまた、星鐵学院三大美女に数えられている）

「あれ？今日は、刹那さんとは一緒じゃないんですか？」

「今朝は、色々あったからね……」

ハハハ……と苦笑をしながら今朝のことが甦ってきてしまった。

「あつ、よかったら一緒に学校に行きませんか？ナツルさん」

「いいよ。一緒に行こ」

こんな会話をしてわたしは、沙倉さんと一緒に学校に向かった。

「あ、そうだ。わたしがあげた臓物アニマルどうでした？」

彼女に唯一欠点があるとしたら、これだろう。

「気に入ったのなら、まだいっぱいあるですよ」

沙倉さんは、鞆の中から臓物アニマルのカタログを出してわたしに見せてきた。

そう、何を隠そうハラキリトラは沙倉さんに貰ったものだ。

「これなんてどうですか？ハラキリトラのストラップです」

沙倉さんの趣味は、臓物アニマルシリーズを大量に集めることらしい……

そして、余ってしまったものをわたしにくれた様に里子に出しているらしい。

「いや、ひとつでいいよ……」

いきなり喋りだしたなんて言えないしね……

「あれ？それ、ブレスレットですか？」

臓物アニマルの良さを話していた沙倉さんが、私の付けている誓約の腕輪に気が付いた。

腕輪を触りながらわたしは、

「いや、よくわかんないけど、腕輪」

「どこブランドですか？」

「うん。なんというか、ケンプファー？」

「ドイツのブランド？」

「違うと思う……」

よくわからないが、ケンプファーとはドイツ語のようだ。

てか、沙倉さんよくそんなことを知っているな……

「あら、光ってる」

えっ、と思い急いで確認してみると光っていた。

どこかの地上で3分間しか戦えない巨人のタイマーのように。

沙倉さんの前で変身するのはまずいと思い急いで身を翻して、

「沙倉さん、わたし急用を……」

思い出した、と言おうとした時、私の頭に銃口が向けられていた。

「よお……お前があたしの敵なのか？」

銃の持ち主は、女の様だが大変なダミ声でそう言った。

「い、いきなり何！路上強盗！？」

わたしは、両手を上げながら叫んだ。

「馬鹿言ってんじゃねえ。こんな美しい強盗がいるか」

「見かけじゃない！」

「じゃあ名前かって、お前、瀬能ナツルか？」

襲撃者の女はわたしの顔を見て驚いていた。

「なんでわたしの名前を知って……」

「ちっ、なんでもねえよ」

そう言いながら、銃をさらに突き付けてきた。

「ちよっ、危ないって！なんなのこの銃！！」

「これか？こいつああたしの武器だ。トリガーを引けば弾が出て、お前をぶち抜く。おつむに当たれば呼吸用の穴をもう一つ開ける。文学的だろう？」

何が文学的なのかわからない。

「お、沙倉じゃねえか。同級生か……しょーがねえ、あたしは戦わなきゃいけねーから……」

女は薄く笑いながら引き金を引こうとしていた。

「二人まとめてぶっ殺す」

やられる！私がそう思った瞬間、いきなり腕輪が強く光り、体が勝手に動き出した。

「きゃあ！」

「――！まちやがれ」

腕輪に引つ張られるように走るわたしを女は追いかけて来た。

角を一つ曲がったところで、わたしは、腕輪の光に包まれた。

「はっ……あはははっ！こりゃいい！やっぱおめえもケンプファーだったのか！」

光の中から出て来た私の姿は、今朝の時の姿と同じだった。

普段は結い上げている髪は、腰くらいまでの長さがあり、それを普段の刹那と同じように首もとで縛っている。若干、髪の色も濃くなっていた。

「はっ、お互いケンプファーになったことだし、たつぷり戦ろうじゃないか！」

「うわっ！？」

猛犬女は、いきなり銃を発砲し、私は、反射的によけた。

「ちょっと待って！なんでお前と戦った！！」

「何だ知らねえのか？ケンプファーってのは戦うために存在してるんだ。あたしはおめえの頭を木星まで吹っ飛ばす！！」

「だからなんで！！」

「ケンプファーの敵はケンプファーなんだよ」

ハラキリトラめ。何が『内緒』だ。

でも、戦うつていつても、わたしは素手だ。

「ちょー！！」

わたしがそう考えているときに、女が撃ってきた。

「はは、やるじゃねーか！」

猛犬女は、さらに銃を撃ってくる。

ギリギリでわたしはよけ続けた。

とその時。

「ナツル……さん？」

沙倉さんがひよっこり顔を出した。

「まだいやがったのか。おとなしく学校行きやあいいものを」

そう言つて猛犬女は沙倉さんに銃口を向けた。

「クソ女、邪魔すんじゃないよ」

「おい！」

わたしは叫び、手が熱くなるのを感じた。

そして、その瞬間、わたしの手から炎が出たのと沙倉さんの姿が消えたのが重なった。

「……てめえ、魔法か」
ツァウバー

猛犬女の後ろのブロック塀は、わたしが出したと思われる炎によって粉々になつたいた。

「それに、もう一人いやがったとわな……！」

わたしの後方に銃を向けながら猛犬女はそう言った。

銃を向けたほうを見ると、わたしは驚いた。

そこには、沙倉さんを抱きかかえた、わたしたちと同じ腕輪をした銀髪の女がいた。

「てめえ、何者だ？」

猛犬女は睨みを利かせながら言った。

「ただの通りすがりだ」

わたしは、その声をどこかで聞いたことがあるような気がした……

第1話（後書き）

お久しぶりです。

ここ3カ月間バイト漬で全然書けませんでした。

てか、学校が始まってから書けるってどうよ……

書き始めたからには完結はさせますので未永く見守っていつてくだ
さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0018j/>

けんぷファー!?

2010年10月12日01時04分発行